

ミシシッピ大学における人種問題

高 橋 宏

アメリカ合衆国 Mississippi 州北部の Oxford という、人口15,000の田舎町にある the University of Mississippi に、1979年7月から1980年2月まで滞在した。1979-1980年度の ACLS American Studies Fellow として、アメリカ南部文学について、特に、この町に1962年の死に至るまで60年間住み続けた William Faulkner について調査研究することが主目的であった。南部における人種問題は、Faulkner 文学の大きな根のひとつでもあるし、1950年代から澎湃として起こった黒人の人権獲得運動のうねりの中で、Faulkner がかなり思い切った発言をしているので、Faulkner 観察という視点から、この問題は素通り出来ないであろうとは予感していた。事実、liberal としての Faulkner と南部白人としての Faulkner とのディレンマは非常に興味のあるテーマではあるが、これはいずれ別の場所で取り扱うこととなろう。小生としては、積極的に人種問題に頭を突っ込んでみようとは、決して考えていた訳ではないのであるが、Ole Miss 滞在中に、たまたまいくつかの黒人学生の自己主張の情景を目にし、またひょんなことから人種間の緊張が高まった様相を目のあたりにしたので、行きずりの傍観者でしかあり得ないながらも、それらの印象を記録にとどめておくことは意味のないことではあるまいと感ずるのである。

1979年8月1日午後4時頃、Lyceum と呼ばれる本館のポーチに約15名の黒人学生が集まっているのを通りすがりに目撃した。何の目的で集まっているのかは、その時は分からなかったが、翌日の学生新聞で事情が明らかとなった。この学生新聞について簡単に説明しておく、これは *the Daily Mississippian* という、学生の編集による8ページ立ての新聞で、学期中のみ月曜日から金曜日まで毎日発行され、無料で配布される。配布されるといっても、朝の10時頃に図書館入口、学生会館内、各ビルディングの廊下の隅などに50部ぐらいずつどさっと置いておかれて、欲しい人が勝手に拾い上げて行くことになる。きめこまかな編集がなされているというよりは、全体的に大雑把な感じで、1ページにつき世界的ニュースやキャンパス内のニュースがせいぜいよっつつ載っている程度で、他に論説、投書、広告、マンガなどであるが、結構充実感はあるので、小生は目につく限りは1部頂戴して愛読していた。

さて、この学生新聞によると、黒人学生の数は約70名だという。55名程が本館内の廊下や学長室の中などに入っていて見えず、ポーチにあふれ出した15名だけを小生が見たのであろう。彼らは、特殊教育コース (comprehensive communicative disorders) の大学院の試験で3名の黒人女子学生が落第した件について、学長、副学長、大学院研究科長に抗議していたのである。直ちに3名のうちの1名は条件付きの合格点を与えられたので、残る2名の再試験を認めよ、というのが彼らの要求であった。秋学期に入れば、多分、再試験が認められる

こととなろう、という見通しであり、一件落着かと思われたのであるが、ところが、数日後、町で発行されている日刊紙 *the Oxford Eagle* で、この2名の黒人女子学生が、この件について、人種的偏見が教授側にありとして、正式に郡裁判所に提訴した、という記事を目にした。この裁判がどのような決着を見たかについては、残念ながら、知らない。

Mississippi 州でも教科書裁判が進行中であった。1979年9月10日の *the Daily Mississippian* によると、第9学年(中学3年)用の Mississippi 州史の教科書の検定に関して係争中の事件を審理している連邦地方裁判所判事が、判決を11月なかばまで延期した、ということであり、この事件の経過、背景がかいつまんで説明されている。各州内部の公立学校及び教区学校で使用される教科書を検定する制度を持つ州は、全米で23あり、Mississippi 州の場合は、州教育長によって任命される3名と、州知事によって任命される4名と、合わせて7名からなる州教科書検定委員会 (the State Textbook Rating Committee) がある。この7名の人種の色分けは、白人5名、黒人2名で、問題の教科書、*Mississippi: Conflict and Change* に対して、白人5名が反対、黒人2名が賛成という意志表示をしたため、委員会はこの教科書を不適当として拒否したのであった。この判定を不服とした著者2名が1975年に提訴した、という訳である。拒否の理由は、教師用のマニュアルが用意されていないこと、平均的生徒にとってむずかし過ぎる語彙が使用されていること、そして人種的偏向が見られること、以上の3点である。最後の点についてもう一言つけ加えるならば、市民権闘争、奴隷制、南北戦争後の再建時代 (Reconstruction) に焦点をしぼり過ぎている、というのである。ひとりの委員は、「この教科書には余りに問題点が多くあり過ぎて、Mississippi の学校のカリキュラムの中には収まりきれないだろう」と言い、もうひとりの委員は、「この教科書の中にある理念は大人のものであるから中学校に適わしくない」と言う。白人リンチ集団によって炎の中に放り込まれている黒人の写真が好ましくない、と言う委員もいる。ところが一方、この教科書は著名な教育家や歴史家には高く評価されているのであって、例えば、Duke 大学の Lawrence Goodwyn 教授は、「特異なる業績である。私の知る限りでは、アメリカのひとつの州の歴史書としては最高のものである」と言っている。また、*Future Shock* の著者、Alvin Toffler は、「この教科書を使用することによって、Mississippi 州は地方史教育における先駆者となるであろう」とその意義を賞揚する。

この本は大学の書店でも売っているというので、小生も早速7ドルで買い求めて来て目を通してみた。確かに、表題に 'conflict' という言葉が掲げてある通り、差別、抑圧、扇動、抵抗、闘争、戦争というような、決してきれいな事ではすまされない人間の営みの諸相が、大胆に直截に描写されているので、読者はまずもって、この地域の歴史の持つ重みと暗さに暗澹たる思いにとらわれるに相違ないと想像されるのであった。この本の中に嘘偽りがなければ、どれ程醜悪であろうとも、歴史の真実相を呈示することにおいて躊躇すべきではなからう、と小生は考えるが、しかし、この点に関する慎重派も多いということは、南部理解のためのひとつの認識として、呑み込んでおく方がよさそうである。

8月中頃から9月中頃まで、学生会館の中で募金風景をよく目にした。マヨネーズか何かの空きびんが沢山テーブルの上に並べられてあり、学生や教官達が1ドル紙幣とか25セント

硬貨などを突っ込んで行く。Traveller I のために献金してくれ、ということであった。10月下旬にキャンパス内で、Homecoming という賑やかな行事が行なわれる。日本の学園祭、あるいは寮祭というのに当たるか、キャンパス内の fraternity (男子学生のクラブ組織の寮) や sorority (女子学生のクラブ組織の寮) が夫々の寮の正面に趣向をこらしたデザインの大きな壁をおっ立て、入口がつけてあり、夫々の先輩達を招待するのである。また、大々的にフットボールの試合が行なわれたり、夜遅くまで寮の前庭でジャズ・コンサートが催される。この時のフットボールの応援に愛嬌を添えるマスコットが、Colonel Rebel という人気者である。カーネル・レブル、すなわち、レブル大佐という訳であるが、Rebel というのは「反逆者」の意であり、南軍の老退役将校のイメージである。白い口髭に白い顎髭、シルクハットに燕尾服、そして杖に大きな靴。このなりで、フットボールやバスケットボールの試合中、ゲームが中断されている時などにしゃしゃり出て来ては滑稽なしぐさなどしてみせて観客を楽しませたり、あるいは応援団と一緒に Ole Miss チームのための応援の指揮を取ったりする。さて、4年生有志が、来たる Homecoming のフットボール試合には、このレブル大佐を馬に乗せてやろうと考えたのである。15,000ドルの馬の購入資金は先輩同窓生におおぐとして、まず手始めに、先輩同窓生への依頼状の印刷・発送費としての500ドルを学生募金でまかなおうというのであった。この馬の名前はすでに Traveller I と決まっていたのであるが、これは南軍の敗将 Lee 将軍の騎乗せる馬の名であった。

ところが、この馬の名前はけしからぬ、と黒人学生が文句をつけたことにより、人種問題という古い傷口がぱっくり口を開いてしまったのである。かねてより、少数グループの黒人学生集団 (the Associated Student Body という自治体組織の学生連盟の中に the Black Student Union という団体も加盟している) の自己主張を目に余るものと感じていたらしい白人学生達も、つまらぬことに目くじら立てるものではない、南部の伝統の中でのお遊びに過ぎないのだ、と発言し始める。学生新聞紙上でホットな論戦が続いていたが、火に油を注ぐ形となったのは、学生新聞紙上でかねてから健筆を揮っていた David Robinson という法学部学生の論説委員の戯文であった。この度の馬の名前に関わる騒ぎは愚劣の極みである、と、白人学生の立場から、黒人学生の真剣なアピールを嗤い飛ばしてしまったのである。これに対して一黒人学生が匿名で長文の反論を学生新聞に寄せたが、この中で筆者は一気に問題を拡げてしまい、白人優位の Ole Miss の中での黒人学生の日頃のうらみつらみをひとつひとつ事例を上げながらぶちまけ、あくまで偏見打破のために闘うという姿勢を明確にし、David 君に、夜になったらキャンパス内を歩かない方がよかろう、と脅しをかけるのであった。この文章は、心情的には同情出来るものではあったが、いかにも性急過ぎるトーンで書きなぐられていて、つけこまれる隙だらけという感じであった。果たせるかな、2名の客員論説委員が、続けてこの匿名氏への反駁文を学生新聞に載せた。匿名であることの卑怯をなじり、脅しをかけたことの愚劣さを嘲笑し、黒人学生の上げたひとつひとつの事例についていちいちことこまかに反駁を加えるのであった。要するに、黒人が差別されていると感ずるのは思い過ごしであり、白人側には差別意識など全くない。機会は誰に対しても平等に与えられている筈なのであり、黒人は白人から何かを与えてもらおうなどと甘ったれるのではなく、欲しいものは自分の力で獲得すべきである、という論旨である。馬の名前については、次のような言い方をしている。

「マスコットに Robert E. Lee の馬の名をつけることについても、別に黒人に対する偏見がある訳ではない。Lee は南軍の將軍であった。そして我が大学は南部の大学である。彼は我々の伝統の一部である。Lee は奴隷制のためだけに闘ったのではなかった。実のところ、この問題について彼がどのような意見を持っていたか、私は知らない。しかし、奴隷制の他に、土地を守るとか経済とか工業とか、いろいろ多くの問題がこの戦争にはからまっていたのである。黒人の中には、白人の主人と一緒に闘った人だったのである」

David Robinson 君も、勿論、黙っているような人ではなかった。しばらくして、この人も匿名の黒人学生への反駁文を物したが、論旨は、先に述べた2名の客員論説委員と殆んど同じである。ただ、David 君の文章の方に鋭い棘が潜むかのようであった。我々は Ole Miss の南部的伝統にひかれて集まって来るのである、その伝統が気に入らないというのであれば、よその大学へ移ったらよかろう、と言って黒人の神経を逆なです。彼の言葉も少々引用してみよう。

「私が意図したことは、馬の名前に関する『論議』がいかに馬鹿らしいものであるかを示そうとすることであった。もし彼の立場が正しいとすれば、南北戦争以前の南部あるいは南部連盟 (the Confederacy) について少しでも言及すれば、それが黒人の顔をひっぱたくことになるらしい。

The War Between the States (南北戦争のことを南部人はこう呼びたがる) は奴隷制に関して戦われた、と言うのは単純化が過ぎるというものだ。……南部は奴隷制を守るために戦争をしたのではない。1861年における南部奴隷制は、いくらでも論証し得ることであるが、今日の女性の投票権と同様に攻撃されてもびくともしないものであった。

では、何故に南部は戦ったのか。もし彼がその答を知っているとすれば、ストックホルムでノーベル賞が待っていてくれるであろう」

人種間の緊張が高まって行く傾向にあることを憂慮した学生連盟執行部は、11月中頃になってこの問題を取り上げ、馬の名前は、黒人学生の反対のため Traveller とはせず、命名のための委員会を作って考えてもらうという決定をみた。また大学当局も無関心ではいなくて、学長の要請によって、学生連盟会長など数名の学生側代表が大学側代表と会見し、それでも馬の名前に関する委員会が設立されることが確認されたのであった。

黒人側の不満は、馬の名前だけではなくて、マスコットの Colonel Rebel という名前も面白くないし、また、ゲーム応援に用いられている南部連盟の旗もけしからぬ、と、Mississippi が奴隷州であった時代を想い起こさせる物は一切使用すべきでない、というところまで行くのであるが、黒人学生の中にもそれ程神経質にならなくてもよいではないか、と言う向きもあるようであった。そして、白人学生側としては、馬の名前については妥協出来るが、古い伝統のシンボルとしての応援旗と Colonel Rebel というマスコットまでを何か別の物に変更することは到底許せないことであるという伝統維持の観点と、10パーセント以下の数の黒人学生の意志が90パーセント以上を占める白人学生の意志を抑圧することが許されていいものだろうかという多数派の論理とからの発言が、相変わらず活発に続いたのである。大学当局が確認した、馬の名前に関する委員会を揶揄する痛烈なる戯文がまたぞろ客員論説委員によって学生新聞紙上に発表されたりした。「Mississippi 大学における人種的改革に関する学長あて特別レポート」という体裁を取ったその文章の中で、Todd Palmer, T. S. Palmer 及び

Todd Starr Palmer から成る1人委員会 (the Committee of One) は次の如き提案をすると言って、7項目にわたる改革案を披露するのである。①この大学への入学を許可される唯一の人種はベージュ色とする。②南北戦争及び人種についての全ての言及は排除する。Black, white, Sammy Davis Jr., blackjack, watermelon, その他の若き傷つき易き精神を傷つけるような言葉は使用してはならない。③ The University of Mississippi は the University of Inter-Racial Harmony and Just Plain Good Friends と改名する。以下省略。

黒人学生側の強い要望によるものと思われるが、学生連盟 (会長は白人学生) が、黒人市民権運動の英雄 James Meredith 氏を講演に招いたのは11月19日の夜であった。この人のことは、先に紹介した中学校用の歴史教科書の中にも詳しく説明されているが、1962年9月に初の黒人学生として Mississippi 大学へ転入学した人である。この時、州法を楯に取り入れさせまいとする州知事と、連邦法の定めるところにより是が非でも入れさせるとする時の大統領ケネディとが真っ向から衝突、ついに2万以上の連邦軍の派遣、そして2名の死者を出すという大事件に発展してしまった。しかし、この人は無事に政治学のコースを修了、1963年めでたく卒業し、その後 Columbia 大学で法学を修め、ニュー・ヨークにしばらく滞在の後、故郷 Mississippi 州 Jackson に戻り、今はそこで株式仲買をなりわいとしているとのことである。

Meredith 氏の話は小生も拝聴しに出かけた。400名程の聴衆は、黒人と白人とが丁度半々ぐらいと思われた。また、一般公開であるので、学生ばかりでなく教職員あるいは一般市民もかなりつめかけていたようである。主催者は学生連盟であるが、副学長も列席していて短かい開会の挨拶をした。Meredith 氏は、背は低いがかがしりした体つきで堂々たる面構え、縞の開襟シャツに革ジャンパー、ジーンズにつばの広い黒のフェルト帽というラフないでたち。帽子をかぶったままマイクの前に立つと、聴衆は一斉に立ち上がって拍手をする。彼はまず小手をかざして何かを探しているようなポーズを見せ、「馬を探しているところだ」とジョーク。馬の名前については学生投票で決めたらよからう、という提案を行なった。それから、用意して来たスピーチを約1時間にわたって読み上げたが、その骨子は次のようであった。

「黒人と白人との平等ということは有り得ず、両者はますます分極化せざるを得ないであろう。白人が一番心配していることは、Mississippi 州における白人優位 (white supremacy) の立場が黒人によっておびやかされることである。私がこの大学に入学しようとしたのも、教育のためというよりは、白人優位のシステムを打破したかったからであった。

私としては、個人的に差別されたとかされなかったとかはどうでもよいことで、問題は、Mississippi 州憲法が今だに差別撤廃 (integration) を違法としていることである。州法の改定が必要である。

大事なことは、黒人がどんどん社会的ポジションを獲得して行くことである。そのためには、知識を得ることが必要である」

Meredith 氏の話で印象的であったことは、何と云っても、この人が実にきびしい見方をしていることであった。その非妥協的で闘争的な姿勢のために、彼は黒人の中でも少数派に属する、ということは彼自身も認めている事実である。大学当局も、彼の考え方に賛成している訳ではなくて、いくら少数派といえども自分の意見を表明することは自由である、という

立場を取っているようであった。

もうひとつ印象的であったことは、Meredith 氏や、講演後の質疑応答の時の質問者の発言に対して、会場内が白側と黒側とにはっきりふたつに分れて反応することであった。白人の質問者の発言に対して白人達は拍手するが、黒人達は、分っちゃいないなどでもいうかのよう、ウーウンと嘆息をつく。そして、Meredith 氏の言葉に黒人達は拍手し熱っぽい反応を示すが、白人達はただ沈黙している。質疑応答で、例えば、白人がこんな質問をする。「この大学の学生達が黒人学生のことを元奴隷と考えている、と思うか」これに対する Meredith 氏の答は、断固としてイエスである。白人側から、「私達は黒人を見ても元奴隷とは考えない。ただ仲間だと思っただけだ」と反論が出るが、彼は、いや、大多数の人々がそう考えているとしか思えない、と頑としてつっぱねるのであった。

黒人側の醒めた意識と、白人側の善意とが同居しながら、このような生々しいテーマについて語れば語るほど、水と油のような違和感が生ずるのは否めなかった。ただひとつの救いは、このような微妙な問題についてでありながら、発言者が右顧左眄することなく、ずばりずばりと歯に衣着せず自分の立場を明確にするさわやかさであった。会場内を重苦しい沈黙が支配するということではなく、次から次へと発言を求める人の手が挙がり、「Yes, sir」とか「Yes, ma'am」とか言いながら発言者を指名する Meredith 氏の手さばきがあざやかな印象として残ったのである。

ところで、Meredith 氏までひっぱり出して来た黒人学生の勢づいた姿勢がよほど腹に据えかねたのであろう、例の David Robinson 君は10日後の *the Daily Mississippian* の2ページ目のトップのいつもの「Opinion」欄に、「Ex-slave League holds press conference」という表題の論説を載せた。「元奴隷連盟記者会見す」という、黒人への敵意をあからさまにした、えげつない戯文であり、Meredith 氏の講演会を揶揄するものであった。David 君の伝えたいメッセージは、要するに、極く少数の人達が、嫌がっている多数の人々に無理やり自分達の感情を呑み込ませようとしている、というのである。そして、丁度その頃アメリカ全土を苛立たしい感情の中に陥れたイランのアメリカ大使館員人質事件が発生していて、それから見て、黒人と回教徒との連帯を次のように皮肉るのであった。「有名な人種差別主義者であり、マスコミの豚であり、『元奴隷及び大見出し成りたがり屋分裂連盟』の指導者である」Skippy Peanutbutter が記者からの質問に応じているという情景である。

「Peanutbutter さん」とある通信社の人がたずねた。「あなた方は本当にアヤトラ・ホメイニを支持されるのですか」

「その通り。我々分裂連盟は回教徒の兄弟達を支持します」と Skippy が答えた。「事実、我々はすでに我々の組織の名を『元奴隷及び大見出し成りたがり屋及び殺人的暴虐的宗教的阿呆愛好者分裂連盟』(de Divisive League of Ex-Slaves and Headline Grabbers and Lovers of Murderous, Tyrannical, Religious Nuts)と変更しております」

「それでどうなりますか」と私がたずねた。「もし悲劇が生じた場合には」

「CBS のニュースにはならない、とでもおっしゃるのですか」と Skippy はたずねた。

「私が申し上げているのは、49人のあなたの同胞のアメリカ人が殺されるかもしれない、ということなのですが」

「おお」

如上の風刺文に対しては、黒人側からのみならず白人側からも、轟々たる非難の声が起こり、しばらくの間は殆んど連日 David 君糾弾の投書が *the Daily Mississippian* 紙上に並んだ。小生自身も黙ってはおれなくなり、「批評の極意は相手の身になってみることだ」という小林秀雄の言葉などを引用しながら、下手な挑発は止めなさい、という主旨の葉書を David 君あてに出した。返事は来なかったが、彼には読んでもらえたであろうと思っている。やがて、David 君の論説委員としての適格性と、このような人物に論説を任せていた編集部判断力とが問題とされ始め、編集部では、あらゆる方面からの意見を平等に紹介するのが我々の立場である、との弁明を試みていたが、風当たりは相当きついものがあった。そして、学長までが感想文を寄せ、David 君の姿勢は行き過ぎであって、大学当局としては好ましいものとは考えていない、という立場を表明するに至った。

さすがの健筆家 David 君も、これだけの圧力をかけられては筆を折らざるを得なかったのであろう、その後は彼の名文を学生新聞紙上で目にすることは全然なくなってしまった。そして、1980年と年もあらたまった頃に、David 君は、自分の専門コースの単位取得のために専念しなければならないので、論説委員を辞任することになった、という意味の告示が編集部長名で出た。

彼がいなくなってみると、当然のことながら、一抹の淋しさを覚える向きも出て来る。達者な悪態を吐いていた餓鬼大將が急に姿を消してしまったようなものである。1980年1月28日の *the Daily Mississippian* に載った次の如き投書は、如上の感情のひとつの表われと見ることが出来る。

「イエロウジャーナリストの王者」の失踪というミステリは、私にとってもまた他の諸兄にとってもひとつの重大事である。明らかに、世界は第一級のイエロウジャーナリストを失ったのであるから、半旗を以て遇すべきである、と愚考する。

さすれば、その後釜におさまったらしい、かの高踏的(作爲的?)なる Mohammed El-Sarji 氏の、先のライバルであった David Robinson 閣下の幻影を 読者諸兄は 想起されるであろう。

David Robinson は、シャーと足並みそろえて、どこかに亡命したのであろうか。もしそうであるとすれば、彼は直ちに *Daily Miss.* へ送還されねばならない。さもなければ、——他にいかなる方途があろう?——人質を取ることになるかもしれない。David Robinson は、どこかの緑なす熱帯の小島の砂浜で日光浴中なのであろうか。彼がどこにしようとも、公平なる光に照らしてこの(扇動的)ジャーナリストの過去の行為を調査するための法廷が開かれねばならないであろう。その時はじめて公正が行なわれることとなろう。ひとりの Robinson の失踪が、この地に10人の新しい Robinson を生み出すことにはならないであろう、と期待するものである。神のみぞ知る、David Robinson は実はここのつの頭持つ怪物であるかもしれないではないか。まことに、神のみぞ知る (Quien Sabe?)。(1980・9・30)

Summary

Racial Problems at the University of Mississippi

Hiroshi TAKAHASHI

I am making a report on some racial tensions at the University of Mississippi in which black students rejected the name of a mascot horse as suggestive of slavery and the whites reacted with contempt in their attempts to cling to their Southern tradition and protect their position as a majority.